

令和4年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校 学校経営計画（スクールマネジメントプラン）（実施段階）

学校経営方針（中期経営目標）	前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点（短期経営目標）
<p>校是の「進取」「敬愛」「雄健」の具現化を図り、地域から信頼される質の高い教育を実践することにより、自分の頭で考え、人と協働し、新たな価値を創造する人を育成する。そのために、</p> <p>① 自ら学ぶ姿勢を有し、自ら高みに挑戦する生徒を育て、学力の伸長を図る。</p> <p>② 特別活動等により、知・徳・体のバランスのとれた生徒の育成を図る。</p> <p>③ 生徒、教職員、保護者が一体となって、教育内容の質の向上を図る。</p> <p>④ 学研都市の資源を活用しながら、社会の一員としての自覚を持った生徒を育成し、文化学術研究を実践する学校づくりを進める。</p>	<p>◇ 新型コロナウイルス感染拡大を受け、授業における活動に制約がある中、指導方法を工夫しながら生徒の学びの保障と健康・安全の確保の両立をはかり、家庭と学校の共通理解のもと全校体制で取り組んだ。</p> <p>◇ 探究活動やグループワークの推進、委員会活動、担任・教科担当等による面談等を行い、生徒一人ひとりの意欲を高め、活動に主体的に参加する工夫を重ねた。</p> <p>◇ 附属中学校全学年及び高校1年生1クラスに一人一台のタブレットを持たせ、ICTの環境整備、教員研修、授業での活用を重ねた。学力の向上、データ分析、教職員間の情報共有等の視点で実践研究をさらに進めていく。</p> <p>◇ 高校3年生でスパートゼミを導入し、生徒一人ひとりが目的意識を持って進路実現を果たす工夫をした。今後も主体的・自立的に学習し、挑戦する生徒の育成に向け、さらに教育力の向上を図る。</p> <p>◇ コロナ禍により文化祭や体育祭等の学校行事、中・短期の海外留学や国際交流、ボランティア活動等、生徒が主体性を発揮できる活動について実施ができなかった。今後も可能な実施方法について検討を進める必要がある。</p> <p>◇ 限られた時間内に質の高い部局活動ができるよう計画、指導にあたり、生徒の満足度が高まった。全国大会や近畿大会出場、コンクールでの金賞等の成果を出す部局活動が増加した。</p>	<p>① 学力の3要素（知識・技能、思考力・判断力・表現力、主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度）をすべての生徒に身に付けさせるため、ICTを利活用しながら個に応じた学びにつながる研究・実践を行う。</p> <p>② 質の高い授業と難関大学合格に向けたスパートゼミ、その他進路補習等を効果的に組み合わせ希望進路の実現を図る。</p> <p>③ 南陽祭の実施や4つの奨励（部活動、国際交流、ボランティア、コンテスト）の継続を通して、生徒の主体的・協働的な活動や社会参画の機会を増やす。</p> <p>④ オーストラリアターム留学の実施に向け、校内外連携のさらなる強化を図り、中高一貫教育の効果的な実施と計画的な準備を進める。</p> <p>⑤ 内外の評価を活用し、生徒一人一人を大切にし、個性や能力を伸ばせるよう、学習者起点による学校の魅力化を図る。</p> <p>⑥ ダイバーシティとワークライフバランスに係る具体的な取組を継続して進める。</p>

令和4年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画(スクールマネジメントプラン)(実施段階)【総合評価】

評価領域 (分掌・教科領域)	重点目標	具体的方策	評価		成果と課題
			各項	総合	
教務部	学力の3要素をすべての生徒に身に付けさせるために、各教科が学習内容を研究するための体制を整える。	教員間での情報共有・授業改善に向けて、学期に1回授業見学週間を設定する。	B	B	ICTを中心とした公開授業を積極的に行った。授業見学週間は2学期のみの設定となったが、3学期に入ってからも、各教科からSlackで授業見学の呼びかけを行う意識が生まれている。
		ICTの利活用に関する研修の実施、授業での利用方法の提案等を行う。	B		
	担任・各分掌の運営をサポートし、教育活動・内容の質を高める。	BYODに向けて分掌内での役割を整理し、アプリのインストール等、授業での使用がスムーズに行える体制を整える。	A	A	・BYOD導入初年度であったが、大きなトラブルもなく運用できた。 ・観点別評価については一定の方向性で実施することができ、学期ごとに改善ができた。次年度に向けて更に教科からの意見を踏まえて評価を確立していく。
		令和4年度入学生からの観点別学習状況の評価について、年間での実施から課題等を教科主任会議を通して整理し、次年度に向けて改善する。	B		
中高の連携を強化し、中高6年間の一貫教育の在り方を検討する。	中学3年間の取組から、高校1年生への接続をスムーズに行えるよう、中学校会議・中学校教科担当者会議との連携を月に1回行う。	B	B	中学校において、長欠生徒へのオンライン配信による学習保障の体制を整えた。	
生徒指導部	生徒の主体的な活動を支える。	生徒主体の効率的かつ合理的な活動ができるよう部局顧問をはじめとする関係職員との連携を密にする。	B	B	顧問との連携を密に行い、コロナ感染症予防を十分に行いながら効率的な活動を実施し、全国大会や近畿大会に多くの部局が出場することができた。学校行事においてはコロナ禍での初めての実施ということもあり、生徒会との連携等課題も多く見つかった。
		学校行事における生徒の活動を充実させるとともに、様々な制限下で可能な限りの活動ができるよう努める。	A		
		生徒会活動の活性化を図る。	B		
	中高一貫校としての組織的な生徒指導を実践する。	生徒の状況をきめ細かく観察し、生徒の心的変化を見逃さない体制作りを行う。	A	A	高校だけでなく中学生徒指導担当を設置し、分掌間の連携を密に行った。また、全教職員が生徒観察調査を定期的に行い、生徒の心的変化を細かく観察した。いじめ調査についても全生徒対象に定期的に行い、問題行動等を未然に防いだ。
		個々に応じた効果的な指導を行うとともに、協働的活動を支援する環境を構築する。	A		
		生徒指導事案が発生した際は、関係教職員との連携を迅速に行うとともに情報共有を円滑におこなう環境を構築する。	A		

A:十分達成できている。 B:ほぼ達成できている。 C:達成できているとはいえない。 D:ほとんど達成できていない。

令和4年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画(スクールマネジメントプラン)(実施段階)【総合評価】

評価領域 (分掌・教科領域)	重点目標	具体的方策	評価		成果と課題
			各項	総合	
進路指導部	進学講習や自習室開放を通して主体的な学習者を育成する。	進学講習の内容を教科・学年と検討・調整し、生徒のニーズに対応した学習者起点の効果的な進学講座を編成・実践する。	A	A	夏期講習(1、2、3年)、冬期講習(1、2、3年)、1月講習(3年)、国公立大学二次対策指導2、3月(3年)と生徒の学習目標・進路希望に応じた講座編成を行い、実施できた。 平日の放課後、土曜日(年間20日)の自習室を開放することにより、学習環境・形態を学校としてサポートできた。
		新型コロナウイルス感染症の状況を適切に判断し、放課後の自習室だけでなく、土曜日の自習室開放など自主自学の学習環境・形態を学校としてサポートする。	A		
		生徒が主体的に学習する際に、ICTを活用できる教育環境づくりを行う。	B		
	難関大学進学に向けた効果的な学習指導・進路指導の充実を図る。	高3生対象のスパートゼミへの取り組みを通して、主体的・自立的に学ぶ力を身につけた集団を育成し、難関大学進学に挑戦する生徒数の増加を目指す。	B	B	スパートゼミにおいて志望校別の講座を開講することにより、主体的な学習者への育成を図った。 中高一貫の一期生が来年度に高校3年生となることを踏まえ、6年間を見通した指導計画の立案、実施をより一層図る必要がある。
		各々の学年との連携を密にして効果的な進路学習計画を立案・実施し、進路検討会(第3学年)等で担任の個別面談をサポートし、生徒の希望進路を実現するための進路指導の協働体制を強化する。	B		
		中高一貫教育の効果的な実施に向け、学習指導・進路指導体制を整える。	B		
	各模擬試験データを分析し、活用する。	学級担任・教科担当者が自らFINEシステムやデジタルサービスを活用して学習指導に活かせるように、教員集団としての情報分析力を高める。	A	A	模擬試験の校内分析に関して教科担当者、学年部と協働して学校としての指導方法の共有・蓄積を図った。
各模擬試験データを各々の学年と進路指導部の協働体制で分析し、情報を教員間で共有化するとともに、部長会や教科主任会で今後の進路指導についての協議・提案を行う。		B			
保健部	感染症の拡大継続を受け、感染防止に向けての対策、行動変容につなげる取り組みを継続する。	保健委員会発行"Well-being"を通じて生徒目線のメッセージを発信するとともに、保健室だよりやデジタルサイネージを活用して常に最新情報を提供し、感染症や予防対策について生徒に正しく理解させる。	A	A	各種の便りや保健委員会を通じて、感染症や予防策についての情報を定期的に提供し、全校体制で消毒や換気を行うことができた。とくに消毒と換気については引き続き啓発に努めていく。
		啓発指導、健康観察、体調不良者への対応等に全校体制で取り組むことができるよう教職員に情報を提供するとともに、感染症予防のための消毒を全校体制で行う。	B		
	特別な支援を要する生徒に、組織的・継続的に対応する。	学年部・担任・教科担当者等と連絡を密にして生徒情報を共有し、学校適応指導会議とも連携を図りながら個々の生徒の支援にあたる。	A	A	保健部で得られた情報を、日頃から関係分掌や機関と共有することを心がけ、生徒の支援に生かすことができた。
		外部の関係機関との連携を密にして生徒の実情の把握、理解に努めるとともに、個々に応じた支援を充実させる。	A		
	「自分たちの学習環境は自分たちで整える」という意識を育む。	美化委員会発行"美化委員会だより"を通じて生徒目線のメッセージを発信し、美化意識を向上させる。	A	A	美化委員会の活動を通じて、美化意識の向上をはかった。日々の清掃はおおむね行っているがまだまだ不十分な箇所もあるので、清掃備品等の整備を継続し、清掃指導にさらに力を入れていきたい。
		日々の清掃を丁寧に行えるよう清掃備品を整え、美化指導を充実させる。	B		

A:十分達成できている。 B:ほぼ達成できている。 C:達成できているとはいえない。 D:ほとんど達成できていない。

令和4年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画(スクールマネジメントプラン)(実施段階)【総合評価】

評価領域 (分掌・教科領域)	重点目標	具体的方策	評価		成果と課題
			各項	総合	
図書部	図書委員の活動がより充実したものになるように活動内容を見直す。	中学生独自の委員会活動を開催し、読書啓発活動を促す。	A	A	図書委員会の活動を通じて読書啓発を行った。どの委員会活動も楽しく積極的に取り組むことができた。今後さらに活動を精査、改善していく。
		図書館に対するニーズを探り、魅力ある図書館づくりをする。また、図書委員会だより「F.I.B」を隔月ごとに発行したり、読書月間に「フィレット」を作成したりすることにより、読書啓発を行う。	A		
	教科担当との連携を深め、授業での図書館利用と、教科内容に関する書籍の生徒への貸し出しを増加させる。	授業でより有効な図書館利用ができるように、教科との情報交換を密にする。また、教科で作成した作品展示を通して、図書館に足を運ぶ生徒を増やす。	B	B	国語科の新書カードは生徒の反応も良かった。「今教科で学んでいること」と題して展示を行ったが、展示の冊数や入れ替え時期が難しかった。今後も効果的な展示方法や教科後の連携方法を考えていく。
		教科と連携をし、教科内容に関わる書籍を読ませる仕掛けづくりを工夫する。	B		
	読書活動を啓発し、生徒の目を広く社会に向けさせることにつなげる。	新聞や時事問題といった受験時の小論文、英作文に後々関わってくる書籍を読ませるような仕掛けづくりを工夫する。	B	A	ビブリオバトルの展示や図書委員が作成する「1 box」展示、広報に紹介された本は貸し出しも増えたが、広く社会に目を向けさせる選書や展示には課題が残るため、今後さらなる工夫をしていく。
「1 box」コーナーなどを活用し、多様なテーマの展示を行う。また、読書活動啓発のために、デジタルサイネージ等のICT機器を活用し、図書に関する情報の効果的な発信方法を模索する。		A			
	団体鑑賞などの学校行事に関連した本の展示や校内ビブリオ大会をきっかけに、普段読書をしていない生徒にも読書を促す機会を増やす。	A			
企画研究部	生徒・教職員の人権意識の深化を図る。	教職員の人権意識の深化を促すため、教職員の人権教育研修会を適宜実施する。	A	B	教職員の人権研修を適切に実施した。また、生徒の人権意識を高める機会を各学年で設けた。
		生徒の人権意識を高め、地域の企業・団体等との連携強化や国際交流を通し、生徒自ら課題の発見・解決に取り組む活動を実施・企画する。	B		
	情報発信においてICTの活用を図り、その効果を検証する。	ホームページやSNS等を利活用し、動画などのツールを利用した情報発信を適宜企画・実施し、その効果を検証する。	B	B	適宜ICTを利活用した広報活動を行った。研究・協議の効果的な実施について課題がある。
SNS等を利活用した広報活動の効果やプレゼンテーションについての研究・協議を適宜実施し、その効果を検証する。		B			
事務部	主体的、積極的に学校運営に参画する。	事務の専門性を生かしつつ、効果的な学校運営が行われるよう各部と調整しながら事務を進める。	B	B	各教職員や会議資料等から必要な情報を積極的に収集の上、密に調整を行い事務処理を進めた。
	校内の安心、安全、美化を推進する。	危険箇所を早期発見するため、月1回点検を実施し、計画的に着手するとともに、柔軟に施設管理の改善をする。	B	B	点検を定期的に行い、各種補修等について、早期に対応することができた。今後も適正な予算執行を行い、校内の安心・安全・美化に努めるとともに、各分掌・教科と連携を行う。

A:十分達成できている。 B:ほぼ達成できている。 C:達成できているとはいえない。 D:ほとんど達成できていない。

令和4年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画(スクールマネジメントプラン)(実施段階)【総合評価】

評価領域 (分掌・教科領域)	重点目標	具体的方策	評価		成果と課題
			各項	総合	
第1学年部	高校生としての自立した生活習慣を確立させる。	挨拶を励行させ、清掃活動の徹底を行う。	B	A	挨拶や清掃活動の徹底などの指導を行うことができた。また、学習面では予習・授業・復習の習慣を身に付けさせることができた。
		多様な集団の中で、他者との違いを認め他者を思いやる姿勢を身に付けさせる。	A		
		学年団と教科担当者が協力しながら、予習・授業・復習のサイクルを身に付けさせる。	A		
	進路実現へ向け幅広い視野を持たせるとともに、挑戦する心を養わせる。	様々な情報発信を行い、幅広い視野と将来の進路への展望を持たせる。	A	A	将来の進路を考えさせるために様々な取り組みを行うことができた。一方でボランティアやコンテストへの参加を促すことは十分できたとは言えない。
		部活動や国際交流、ボランティアやコンテストへの参加を促し、活動の場を広げさせる。	B		
	情報活用能力やメディアリテラシーを身に付けさせるとともに、デジタルシティンシップを育む。	主体的にICT機器を活用し、より深い学びへと繋げさせる。	A	B	ICT機器を主体的に活用させることができた。しかし、メディアリテラシーの指導の機会が十分設けられたとは言えない。
情報社会で生きていく中で必要な情報モラルやネットマナーの指導を適宜行う。		B			
ICT機器の利用において、他者への影響を考えさせ自律心を育む。		B			
第2学年部	高校生としての自覚を持ち、自立した行動がとれるように、基本的生活習慣を身に付けさせる。	ルールやマナーの意味を深く理解した上で、規範意識を持って学校生活に臨むよう促す。	B	A	・遅刻が増加傾向にあり、改善が望まれる。 ・日常の清掃活動等、積極的な姿勢で取り組むことができている。
		教室や施設をきれいに使用し、協力して良好な学習環境を作り出す意識を持たせる。	A		
	より高い目標に向かって着実かつ主体的に学習する姿勢を身につけさせる。	授業を中心とした学習サイクルを確立し、実践できるように教科担当と学年団が連携を深める。自立した学習者の育成を実践するため、生徒が個々にセルフコントロールしやすい学習環境を与える。	B	A	・自立した学習者の育成に向けて、学年と教科の連携を深める必要がある。 ・各々の生徒が高い目標を維持し、進路目標に向かって良好な姿勢で取り組んでいた。
		高い目標を維持していくために、進路指導部と連携し、大きな目的集団の形成を目指す。また、目標に対し、簡単には”依らない・折れない・ぶれない”姿勢を身につけさせる。	A		
	校内行事や校外活動に積極的に参加させ、多様な関わりの中で人間的成長を促す。	研修旅行・文化祭・体育祭・学年行事等に自主的に取り組みませ、どのような状況下でもそれぞれに適応した行事を実行していく姿勢を育む。	A	A	学校行事において集団として自主的かつ積極的な姿勢が見受けられ、各クラスとも集団形成に好影響を与えることができた。
		様々な集団活動の基本には、人権の尊重があることを日々意識させる。	B		

A:十分達成できている。 B:ほぼ達成できている。 C:達成できているとはいえない。 D:ほとんど達成できていない。

令和4年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画(スクールマネジメントプラン)(実施段階)【総合評価】

評価領域 (分掌・教科領域)	重点目標	具体的方策	評価		成果と課題
			各項	総合	
第3学年部	自立した生活習慣と高い規範意識を確立させ、人間性豊かな生徒を育てる。	挨拶の励行と清掃活動の徹底を促し、ホームルームをはじめとして機会あるごとに、ルールの遵守や他者への思いやりの大切さを説く。	B	B	清掃活動はしっかり取り組めた。ただ自ら挨拶できる生徒が少ないのが課題である。また、生活記録表をつけさせることにより、予習する習慣はついた。きっちり取り組めない生徒もいて、全体には浸透し難い状況であった。
		生活や学習のリズムを自己管理できるよう、生活記録表をつけさせる。	B		
	各自に主体的な学びを継続させ、希望進路の実現に向けて全力を傾けさせる。	担任と教科担当者が連携を密にして個々の生徒の状況を適切に把握し、生徒に対しては個人面談をまめに行い、授業を大切にさせるとともに生徒に応じた指導を適切に行う。	B	B	
		進路指導部と連携して、進路への取り組みを充実させるべくタイムリーな情報を提供する。	B		
	さまざまな行事を通して生徒に活躍の場を与え、互いに協力し合って目標に向かえる集団を作る。	部活動等への積極的な取り組みを通じて個々の可能性を広げさせるとともに、最高学年として下級生の範となる意識を持たせる。	A	A	
		南陽際などの行事で生徒が主体的に活動できる場をできるだけ多く作り、自己肯定感を高めさせるとともに、互いを尊重し合える集団を作る。	A		
サイエンス リサーチ科	主体的に探究する意欲を育ませ、科学的な考え方を身につけさせる。	関西文化学術研究都市の研究機関や近隣の大学との連携を深め、生徒が第一線の研究に触れる機会を充実化する。	B	B	大学や研究機関と連携し、夏季実習等の取り組みを実施した。校内と自宅の双方向的な活動(Teamsを利用)に関しては、そのレベルに個人差が大きく、課題が残った。
		探究活動におけるタブレットPCの効果的な利用方法(特に、校内と自宅の双方での利活用方法)を模索し、研究内容の質的向上を目指す。	B		
	校内外での研究発表を活性化し、本学科の魅力発信に努める。	オンラインツールを利活用した新たなプレゼンテーション(研究成果発表)の在り方を研究するとともに、そのスキル向上を図る。	B	B	
		科学コンテストや発表会への参加を促し、その取り組みをサポートする体制を強化する。	A		

A:十分達成できている。 B:ほぼ達成できている。 C:達成できているとはいえない。 D:ほとんど達成できていない。

令和4年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画(スクールマネジメントプラン)(実施段階)【総合評価】

評価領域 (分掌・教科領域)	重点目標	具体的方策	評価		成果と課題
			各項	総合	
附属中学校	特色ある中高一貫教育の確立のための実践研究を行う。	自立した学習者の育成を目指し、ICTを活用しながら生徒の主体的な学びにつながる授業研究、授業実践を行う。	B	B	生徒用タブレットを使用して基礎の定着や主体的な学びにつながる活動を実施できた。ただ、課題をこなすことに追われる生徒もいるため、今後も主体的な学びの姿勢を育成するための実践研究は継続する必要がある。
	校内や校外の人材との交流を通して、人間的な成長を促す。	学習活動や学校行事に主体的に取り組ませる中で、仲間意識や人格の成長を図る。	A	B	南陽祭の計画・運営を主体的に活動させ、仲間意識を芽生えさせることができた。また、生徒会を中心に学年を超えた行事を計画・実施することで、学年を超えた協調性を育むことができた。学校外での活動に参加する機会が少なかったため、今後はボランティア活動などにも目を向けさせる工夫をさらに検討していきたい。
		部活動やボランティア活動への参加を促し、活動領域を広げ人間的な成長を図る。	B		
教育課程の充実を図るための研究を行う。	中高一貫校としての教育実践、新指導要領を踏まえ、教育課程の編成について研究を行う。	B	B	中高一貫校として教員が共通意識を持って指導することができている。今後は中学・高校の枠を超えて生徒が自主的に交流できる教育実践のあり方を考えていきたい。	
国語科	教材や指導法、評価方法を研究することで、授業の質を向上させる。	ICT機器を効果的に活用したり、適切な課題を出したりすることで、生徒自身が主体的に思考・表現することができるような授業を行う。	B	B	ICT機器を使い、視覚的資料を適切に用いることで生徒の理解を深めたり、アクティブラーニングを行ったりした。どのような場面でICTを使うことが有効であるのかをさらに研究する必要がある。
		中学生、高校1年生においては観点別評価を適切に行い、指導と評価の一体化を図ることで生徒の学習の深化を目指す。	B		
	主体的に学習する姿勢を育て、希望進路の実現及び実社会に対応できる国語力の育成を図る。	予習・復習等の家庭学習や学習内容の振り返りを通じて生徒が主体的に学習する姿勢を育てる。	B	B	主体的に学習する生徒を育てるためにも、それぞれの学力層に応じた課題の与え方が必要である。ビブリオバトルを通して読書に親しむことができた。生徒をとりまく言語環境が悪化するなか、読書の重要性はさらに強調していきたい。
		共通テストや難関大学の入試問題を研究し、スパートゼミや受験指導の際に活用することで生徒の希望進路実現につなげる。	B		
生徒が広い視野や幅広い知識を持てるよう、折に触れて読書を推奨したり図書館を活用したりする。	B				
中学生には6年間を見通した指導を行うとともに、新学習指導要領の確実な実施を目指す。	6年間一貫性のある指導を行うため、教科で情報共有を密に行うとともに、中高を問わず、相互に授業見学を行う。	B	B	新学習指導要領に対応し、効果的な学習指導に努めた。一方で試行錯誤の段階であり、情報交換や授業見学を含めて来年度以降はさらなる研修・実践が必要である。	
	新学習指導要領の実施にあたり、教科内で研修を行い理解を深めるとともに、積極的にその実践に取り組む。また、達成状況を評価し、改善をはかっていく。	B			

A:十分達成できている。 B:ほぼ達成できている。 C:達成できているとはいえない。 D:ほとんど達成できていない。

令和4年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画(スクールマネジメントプラン)(実施段階)【総合評価】

評価領域 (分掌・教科領域)	重点目標	具体的方策	評価		成果と課題
			各項	総合	
地歴・公民科	主体的・対話的で深い学びを実現する。	主体的・対話的で深い学びの実践方法・評価方法について、教科内で共有する。	A	B	1年生の教科担当者で丁寧に打ち合わせを行い、主体的・対話的な授業を心掛けた。評価の方法については教科会議などで他学年担当者も含め共有することができた。一方で、講師の先生との打ち合わせについて、時間面での制約もあり課題も残った。
		新学習指導要領での教科指導について、実施内容・評価方法を教科内で検討し、統一した指導を行う。	B		
	中高一貫を見通した指導を行い、附属中学校から高校への円滑な接続を果たす。	新学習指導要領実施も踏まえつつ、中高一貫教育の6年間の指導方針について検討する。	B	B	ここ数年で教員の入れ替わりも多く、中高一貫教育について今まで行ってきたことと、これからについて教科内での統一した認識を持つのが難しかった。まだまだこれからも検討を続けていく必要がある。
		附属中学校でこれまで実施してきた指導を再検討し、指導内容の整理・再検討を行う。	B		
	新学習指導要領や大学新入試を踏まえた授業を行う。	新入試の傾向を各科目担当で分析し、指導内容を検討・共有する機会を学期ごとに設ける。	B	B	ICT活用や生徒主体の授業実践について、各担当で実践し、個々の教員間での共有はあったが、教科全体での検討・共有は年に1回に留まってしまった。スパートゼミについて、各担当者による裁量が大きく、教科としての検討・共有を今後も行っていきたい。
		スパートゼミの効果的な活用方法について、教科内で検討・共有する機会を学期ごとに設ける。	B		
ICTを活用した生徒主体の授業の実践を推進し、実践内容を検討・共有する機会を学期ごとに設ける。		B			
数学科	学力の3要素をすべての生徒に身に付けさせる指導方法を確立する。	個に応じた学習指導を行うことで、基礎的な数学力を定着させるとともに、個々の数学力がより向上するような質の高い授業を展開する。	A	B	<ul style="list-style-type: none"> ・同一科目を担当する教員同士で連携を取り、日々の授業において生徒の数学力を向上させ、希望進路に対応する授業を展開出来ている。 ・BYOD学年が年次進行するのに伴い、BYODの実践例やICTの活用の仕方の共有の機会を増やしていきたい。
		希望進路に応じた課題設定を行うことで、計算力及び論理的思考力、記述力を養い、また適宜発表活動等を取り入れながら、希望進路が実現できる数学力を培う。	A		
		BYODや中学での授業の実践を教科内で共有し、個々の教員がICTをより一層効果的に使えるようにすることで、生徒の学力伸長に繋げる。	B		
	数学を楽しみ、主体的に探究する精神を育成する。	学年や実態に応じて、生徒が興味関心を持って主体的に学び合えるような教材や指導方法を教員間で共有し、実践する。	B	B	<ul style="list-style-type: none"> ・日々の授業においては、各々の教員でも工夫し生徒が興味関心を持てる授業を展開している。 ・コンテストについては、総探やサイエンスの活動の中で教員からの仕掛けがないと、積極的な参加は厳しい。 ・教科横断型の授業については、高2の前半までに行きたい。
		数学検定やその他コンテストへの積極的な参加を呼びかけ、数学の魅力・面白さに触れたり、普段とは異なる数学の問題へ挑戦したりする機会を増やす。	B		
		数学の枠を超え、教科横断型授業を展開し、数学の必要性・有用性を生徒に実感させる。	B		
	中高一貫教育および難関大学進学に向けた指導体制の充実及び教科指導力の向上をはかる。	6年間を見通した授業の進度及び指導方法について、適宜教科会議で共有し、進捗状況を確認する。	B	B	<ul style="list-style-type: none"> ・スパートゼミおよび講習について、同一学年を担当する教員同士では連携が取れている。教員「全体で」気兼ねなく共有する雰囲気を作りたい。 ・新カリになった高校1年生については、見直しをもって進度を考えた。
		スパートゼミの進捗状況を、教科で共有する場を適宜設定し、難関大学進学に向けた指導方法を確立する。	B		
		夏期講習や冬期講習の内容に関する議論や振り返りの場を設けることで、より充実した講習ができるようにしていく。	B		

A:十分達成できている。 B:ほぼ達成できている。 C:達成できているとはいえない。 D:ほとんど達成できていない。

令和4年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画(スクールマネジメントプラン)(実施段階)【総合評価】

評価領域 (分掌・教科領域)	重点目標	具体的方策	評価		成果と課題
			各項	総合	
理科	個に応じた学習指導を行うことで、生徒に確かな学力を身に付けさせる。	指導と評価の一体化を目指し、新学習指導要領における観点別評価の方法を確立させる。	A	A	・高1において、観点別評価の方法について、一定の方向性を持つことができた。 ・探究活動では、理科に対する興味・関心を起点とした主体的な活動が見られた。 ・各学年で学力や課題を共有し、2年の冬期講習など、新しい取り組みを実施した。一方で、スパートゼミや講習の参加者に偏りや減少が見られ、生徒のモチベーション維持や講習内容の検討が必要である。
		サイエンスの活動や附属中学校におけるダヴィンチの活動と連携し、個々の理科に対する興味・関心を深め、進路指導に役立てる。	A		
		科目主担当を中心にして模擬試験の結果等を分析・検討し、生徒の個々の学力や課題を共有して学力伸長に向けた組織的な指導方法を工夫して、難関大学進学など自ら高い目標をもって挑戦する生徒を育成する。	B		
	新学習指導要領に対応して、ICT活用の充実を図る。	1人1台タブレット端末を効果的に使用するために、教科内で教材共有・実践共有ができるシステムを構築し、実践していく。 事務部をはじめ各分掌や他教科と連携・連動して、効果的にICTを利用していく。	A A	A	・教材の共有を行った。また、研究授業を通し、1人1台タブレットの活用方法を共有・検討した。 ・附属中・高1において、ロイロノート・デジタル教科書の積極的な活用を行った。
保健体育科	卒業後も豊かなスポーツライフを実現する資質を育てる。	自己の体力の現状を把握し、体力向上の方策を考え実践させる。	B	A	・選択制授業を実施し、集団で運動に取り組む中で、運動の技能だけでなく思考力やコミュニケーション能力等の育成につなげることが出来た。 ・生徒がより主体的に自己の体力の現状に向き合い、計画・実践することができるよう指導の工夫を進めたい。
		運動の場面で、公正、協力、責任、参画に対する意欲を高める態度を養う。	A		
		学習指導要領改訂の方向性に合わせ、生徒の実情に応じた選択制授業を実施していく。	A		
	現代における健康課題について知識、理解を深める。	課題学習の研究の質を高め、現代における健康課題をより深く探求する視点を養う。 現代の新しい健康課題について正しい知識を身につけ、健康的な行動をとることができる態度を養う。	A B	A	課題学習において、幅広いテーマを設定し、ICTを活用しながら主体的に探究・発表する姿勢が見受けられた。学習をより実生活に活かすことができるよう指導の工夫を進めたい。
芸術科	表現や鑑賞の学習を通して、多様な芸術についての見方・考え方・とらえ方(思考力・判断力・表現力)を学び、芸術を愛好する心情を育てる。	中学校との関連を踏まえ、表現や鑑賞の基礎・基本的事項をしっかりと把握させる。	A	A	・中学校の既習事項を踏まえた授業が展開できた。 ・自己評価や相互評価をバランスよく取り入れたことで互いに認め合う関係を構築できた。
		鑑賞や制作・発表を行い、多様な表現活動を通して互いに認め合う力が身につくよう支援する。	A		
	自分の言葉で作品を鑑賞・批評する力を育む。	日本の伝統的な芸術と西洋の伝統的な芸術の類似点や相違点を感じさせ、自ら表現することができる力を養う。	B	A	グループでの発表会を通して芸術表現を創意工夫させる事ができた。
		グループ発表・学習を行い、言語活動の拡充を図り、自らの言葉で諸芸術を批評できる心情を育てる。	A		
	生涯にわたり芸術を愛好する心情を育む。	教員間で研究授業や互見授業週間、研修会等を通して、教授方法などを研究し、授業改善に努める。	A	A	ICT機器 (AppleTV、ロイロノートなど) を活用することで視覚的な情報が即時に提示することができる生徒の理解も深まったように思う。今後も有効的な活用を考えていきたい。
		学習者の知的好奇心を喚起させるような授業が展開できるよう努める。	B		
多様な芸術について理解を深めさせるため、視聴覚教具を用いて鑑賞教材を研究し、教科指導力の向上に努める。		A			

A:十分達成できている。 B:ほぼ達成できている。 C:達成できているとはいえない。 D:ほとんど達成できていない。

令和4年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画(スクールマネジメントプラン)(実施段階)【総合評価】

評価領域 (分掌・教科領域)	重点目標	具体的方策	評価		成果と課題
			各項	総合	
英語科	基礎学力を定着させ、希望進路の実現に向けて生徒に学力の伸長を実感させる。	学習の仕方を各学年で共通して具体的に指導し、日常的に家庭学習に取り組み、学年に応じた自学自習の習慣を身につけさせる。	A	B	BYODにより、教材の共有や提出物のやりとりができ、個別に添削をしたり、レベルに合わせた学習をさせることができている。今後も、ニーズに合わせて主体的に取り組むことができる課題の設定を充実させたい。
		生徒個々のレベルと目標に応じた指導をより効果的にするために、ICTを活用しながら、個に応じた学習内容を提供し、効果的に個別指導を取り入れる。	B		
		教科書準拠のオンライン教材活用について研究・実践を進める。	B		
	英語を使って積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する。	生徒が使える語彙指導の充実を図る。	A	A	
		発音指導や音読指導を中心に聞く力を伸ばし、ある程度長さのある英文を意味のかたまりごとに理解し、速読力を伸ばす。(リスニング・リーディング)	A		
		授業で学習した内容に対して、自分の意見を持たせ、今ある英語力を最大限に生かし、英語で書いたり、話したりする機会を充実させる。(ライティング・スピーキング)	B		
家庭科	生活の営みに係わる見方・考え方を働かせ、主体的・協働的な実践活動・体験活動を通じて、よりよい生活の実現を目指す。	家庭や地域における生活の中から問題を見出して課題を設定し、解決策を構想し、実践させる。	B	A	「スマートライフエコ10」と名付けたエコな取り組みでは、各自の実情に合わせた取り組みを設定し、生徒発信によりご家庭にも協力していただき取り組んだ。地道な活動ではあるが、自立に向けた自分発信の取り組みを今後も大切にしたい。
		生活に根付かせる取り組みとして、家庭との協力による復習の機会や年間を通した継続的な取り組みを生徒発信により充実させる。	A		
		成人年齢の引き下げを意識した授業内容の充実に努める。	A		
	中高一貫教育の円滑な実施と、6年間を見通した指導を行う。 ICTの効果的な活用を行う。	附属中学校一期生の学習の成果と課題をもとに、高校に繋げる家庭科教育の在り方を研究する。	B	B	
		ICTの利活用について、効果的な学習指導のための研究を継続し実践を行う。	B		
		研究授業や研修会等を大切にし、授業改善に努める。	A		

A:十分達成できている。 B:ほぼ達成できている。 C:達成できているとはいえない。 D:ほとんど達成できていない。

令和4年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画(スクールマネジメントプラン)(実施段階)【総合評価】

評価領域 (分掌・教科領域)	重点目標	具体的方策	評価		成果と課題
			各項	総合	
情報科	情報について科学的な見方や考え方を養い、活用できる知識や技術を習得させる。	情報の科学的理解と、情報の収集、分析、活用、発信等の実習を通して、問題の発見とその解決の方法を習得する。	B	A	プレゼンテーション実習はクラス内だけでなく学年全体に発表するような機会を設け、様々な生徒の発表を聞き質疑応答の中でコミュニケーション能力の向上を図った。
		将来、必要とされる情報活用能力を習得させる。また、プレゼンテーション実習等を通じてコミュニケーション能力を養う。	A		
	情報倫理を身につけ、情報社会に積極的かつ公正に参画する態度を育てる。	インターネット、SNS、電子メールやスマートフォンやタブレットなどの利便性と信憑性・危険性を理解、把握させる。	A	A	一人一台端末を用いた教育活動がスタートしたこともあり、より私ごととして情報倫理について考えることができた。
		著作権や肖像権等の日常生活における身近な法規を理解し、情報社会の一員として社会に参画する態度を養う。	A		
	教員の教科指導力を向上させる。	情報に関する最先端の内容の研究と指導法の研修を継続的に行う。	B	A	共通テスト試験についての情報の収集や、チーム・ティーチングの教員と指導内容や実習内容の共有を密に行えた。
		チーム・ティーチングを有効に活用できるよう研究を行い、連携を密にする。	A		

学校関係者 評価委員会 による評価	<p>○充実したカリキュラム、熱心な指導を見るにつけ、自分が学生の頃にこんな学校があれば行きたかったと思うほどである。</p> <p>○コロナ対応でリモート化が行き過ぎているところもある。対面と通信ツールのよいところ、そうでないところを見極めて、大事なところは対面を維持し、配信で済むところは配信でという具合に割り切る判断が必要である。</p> <p>○オーストラリアターム留学に参加した生徒と参加しなかった生徒の間に亀裂が入らないか心配したが、説明を聞き安心した。参加不参加ともに今後の人生に活かしてほしい。</p>
次年度 に向けた改善 の方向性	<p>中高一貫生が6学年そろそろのを機に、今まで南陽高等学校が培ってきたきめ細やかな指導を継承しつつも、生徒を「育てる」学校から生徒が「育つ」学校、すなわち生徒の自主性、主体性を育て、生徒自身が学びを実践する学校へと転換していく。具体的には学校行事の企画・運営やルール作りに生徒を参加させるとともに、教師の指導に頼らず、自ら学習に向かう生徒を育成するような授業へと改善を行い、校内に「挑戦する文化」を醸成する。具現化に際してはICT機器の活用を進めつつも、対面による教職員の「語りかけ」も大切にしたい。</p>

A:十分達成できている。 B:ほぼ達成できている。 C:達成できているとはいえない。 D:ほとんど達成できていない。